

試作戦闘機「震電」

大野城市 草壁 恒二

昭和19年6月、敗戦の色濃くB29編隊が日本本土爆撃を始めた。10000mの高高度から来襲に迎撃できる性能の戦闘機は無く、開発も至難の業であった。

しかし、海軍航空技術廠の設計者でパイロットの鶴野技術大尉の発想で、エンジン、プロペラが後部にあり、ペン軸のようにとがった機首に複数の30mm機関砲を装備し、高高度でも時速700km以上という常識を越えた前翼型局地戦闘機の設計が正式採用された。

昭和19年2月、この試作戦闘機「震電」は福岡市郊外の九州飛行機（海軍管理工場）に試作内示され、1号機初飛行の期日は昭和20年1月となった。「震電」は別名「J7」ともいった。当時、私は九州飛行機入社歴6年で、南方島より作戦に活躍する零式三座水上偵察機フロート製作工場に勤務していた。作業は直ちに「震電」機体部品製作に切り替わって、フロートは協力会社に受け継がれた。

工場長は、会社子飼いの技術幹部養成所出身の昇進組で熱血漢だった。私達後輩の青年産業報国隊員を鶴野大尉に引き合わせ、激励の言葉を受けさせた。作業衣の大尉は若く飾らぬ温厚な人柄に見えた。

会社の工場は50棟を超え、昭和18年以降は、学徒動員令で九州各地から中等学校、高等女学校の上学年生、それに独身女性の艇身隊員、農、工、商業の人達が徴用兵として各工場に配属され、その数は3、4万ともいわれた。工場勤務を嫌う女性はコネで官公庁に入職した。フロートを引き継いだ協力会社では、博多検番の芸者衆も工場で勤労した。

産業戦士慰問には、会社中央広場の仮設舞台上、流行歌手の霧島昇や宮城千鶴子（戦後、まり子と改名）等が大拍手を浴びた。

昭和20年1月の「震電」1号機の初飛行は、3月を過ぎても実現できなかった。

戦況は悪化し、会社は爆撃を避けるために移動可能な工場だけ適切な地域に疎開することになった。私の工場も数km離れた乙金山の麓に移ることになった。海軍設営隊により蒲鉾型工場が3棟建てられ、その建設補助作業に工場全員が使役を命ぜられる日もあった。隊員は朝鮮の青年がほとんどだった。工作機械の移動では、2000tプレスが難作業だった。さながら戦国時代の築城の大石を運ぶコロ式で、ロープを引く女子学徒達の気合いの入った黄色い声も時が過ぎると途絶えた。このプレスは国内には2台しかなく、1台は「零戦」を量産している三菱で作動していた。

4月になると、自宅から疎開工場に出勤するようになった。最寄りの私鉄駅からは田舎道を数kmも歩いた。だが、山麓の工場は新緑に囲まれ、清水も流れて宿直の炊飯に助かった。ドラム缶風呂から月を眺め、入社同期生のYが吹く尺八の音も風情があった。

解放感に満ちた作業環境に、女子学徒達は澁刺さを増した。そんなある日、父親が福岡市役

所兵事課に勤務の女子学徒から、私の4月1日の現役入営が7月1日に延期されていると知らせてくれた。私は、もしか「震電」製作に従事中だからかも知れぬと思った。

6月19日、宿直明けで帰宅し、夜の11時過ぎに空襲警報で目醒め、母と居間の床下の防空壕に入った。ザーッと俄雨らしい音がする。異様に感じ玄関を出ると、西公園、薬院方面の空が火炎で赤く染まっていた。俄雨と思ったのは焼夷弾の落下音だった。照空燈は交叉し、近くの長浜海岸埋立地からは高射砲が射撃し出した。だが、迎撃する戦闘機はなかった。近所の炭坑師の別邸に駐屯する陸軍船舶兵が数名、小銃を3、4挺も構えて飛び出してきた。西と東の紅蓮の炎は風を呼び、私の町に刻々と迫ってきた。母は落ち着いていた。父や戦没した二人の兄の新しい位牌を信玄袋に入れていた。私も貴重品を登山リュックに詰めた。「そろそろ出ようか」母はわたしを促して玄関を出た。ご主人が出征して一人暮らしの隣の奥さんは、気が動転し薬缶片手に家を出たり入ったりして母の誘い声も耳に入らなかった。母が決めた避難先は7、8分歩いた県庁前の水鏡天満宮正門前だった。神の加護を願ったのだろうか。私は、神社の氏子で小学生の頃は恒例の夏祭りの夜には境内の一隅に町名入りの幕を張って屯し、龕灯を片手に「願添い、願添い」と唱和して地域を回っていた。県庁も市役所も近くのビルも無事に過ぎた。西を見ると岩田屋が、東を見ると玉屋と片倉ビルがくすんで仄かに見えた。石碑に寄りかかった母は、うつらうつらとしては眼を醒まし、奈良屋校区に住む実家の兄、姉の身を気にしていた。自然消火の焼跡の塵埃が立ちこめた夜が明けると、町内の人達はそれぞれの避難先から自宅焼跡に戻って、お互いの無事を喜び合い、「これでサッパリしましたバイ」と高笑いをした。町内では、博多鋳造業のご主人が仕事場で亡くなられていた。

私の家は、庭の石灯籠とかまどが残っていた。昨夜、仕込んでいた米がほかほかに炊きあがっていた。母が釜の木蓋代りに真鍮鍋をかぶせていたのがよかった。握り飯にもして、太宰府に住む叔父の家に身を寄せた。叔父は帝展無鑑査の彫刻家で、昭和19年に東京から疎開していた。「無法松の一生」の岩下俊作さんが所用で訪問された日もあった。

この6月、試作戦闘機「震電」1号機がやっと完成したが、初飛行はできなかった。

7月1日、私は朝鮮と満州国境の航空部隊に現地入営した。入社同期生Yも内地の航空部隊に入営した。疎開工場の青年は減っていた。

軍隊生活は、3日間のお客様待遇が終わると、「真空地帯」さながらの内務班環境となった。日本人初年兵は脱走しても線路に沿って南に向かうので逮捕されるが、朝鮮人初年兵は民家が匿うので逮捕されなかった。

8月9日、ソ連軍が参戦し、E15型戦闘機が兵舎を襲撃して応戦した。やがて部隊は兵舎を爆破して、朝鮮半島南部の太田市に移動した。すれ違う列車には歩兵部隊が北上して行った。広島、長崎の原爆は朝鮮日報で知った。タブ版で1枚の片面はハングル活字だった。

8月15日、終戦の詔勅は聴けなかった。太田駅校内に集積した軍物資の保管警戒勤務で、駅前広場で現地人の数十名のアジの様子を見たが大事にはならなかった。

朝鮮半島南部を占領した米軍は、空の特攻隊員を即刻帰国させ、航空部隊、歩兵部隊などと

順番を決めて復員させた。だから私は9月中旬には太宰府の叔父の家で、母の安堵した顔を見ることができた。

試作機「震電」は、8月初旬の初飛行で改修の必要があった。そして、終戦となった。

戦後、米軍は「震電」の試作1号機を本国に持ち帰り、その性能や技術に舌を巻き、博物館に保存しているという。